

## 春日和男著「存在詞に関する研究：ラ変活用語の展開」

原口，裕

<https://doi.org/10.15017/12229>

---

出版情報：語文研究. 26, pp.70-74, 1968-10-31. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

『存在詞に関する研究』

—ラ変活用語の展開—

原 口 裕

戦後二十年の国語学の研究史で、ラ変型助動詞をめぐる問題ほど文法学界の関心が集中し、論議の重ねられたものもない。一つの特記すべき動向であったといえるが、その中で、終始独自の説を展開してこられた先生の多年にわたる諸論考が、この度、新たな編集構成のもとにまとめられて出版された。

本書は、古代国語の存在表現にかかわる諸語の史的展開について、資料を博搜してその実態を極め、整然とした構成をもつ体系としてこれを明らかにされたもので、他に全く類書を見ない研究である。その紹介は、勉学の途次にある筆者にとつては甚だ任重く容易でないが、教室の延長と観じてできるだけその責を果そうと思う。理解の浅い点については御寛恕を期待したい。

本書は、緒言、第一編序論二章四節、第二編各論四章十二節、第三編結論二章三節及び関連論文八篇（本文五四三頁）、論文目録、索引（三四頁）、後記よりなり、本論はおよそ三部に大別されているが、各編章の冒頭には、導入のために主題と指針が整理して示され、緊密な構成と行きとどいた編集になっている。

る。以下逐一章を追って紹介する。

緒言はこの研究の範囲にわたる概括的な解説である。古代国語の下限をラ変活用語尾の四段化した時期におき、その間ににおけるアリを基本とする一群のラ変活用語の形成過程と、その体系に関する国語史的事象の解明に焦点がおかれることが述べられているが、そのためには、国語学の諸般に及ぶ多角的な方法と記述が必要であることにふれ、文法史論に終らない本書の幅の広い性格が示されている。

第一編序論は、存在の表現にかかわる諸語についての諸説の検討と、存在詞の展開の基礎的な問題に関する考察である。第一章「存在の表現と存在詞」では、存在表現の基本語彙の解説と整理があり、活用語尾に関して、イ列終止ラ変系とウ列終止一般動詞系の、意義機能上の対立的な二系列想定の可能性にふれる（一節）。近時流行の？語頭母音形成素による語構成説を排し、実証可能な範囲の中で、語尾母音の相違を対立的系列としてとらえて観察の基礎におく方法で、第二章以後細叙される。次に、アリの用法の通時的概観と、文法学史におけるその取扱いの批判的通覧がなされているが、「存在詞」提唱の濫觴たる永井一孝、山田孝雄の説に、チャンブレン“A Simplified Grammar of the Japanese Language” (1881) に説くところの影響があるという新事実が付されている（二節II）。論究すべき事項については、新古の学説を余さず検討して取捨するゆき方が全章節において示され、先生の学問に対する厳しい態度とお人柄がよくうかがわれる。

第二章「語構成と存在詞」は序論の中核をなす。まず、ル語

尾リ語尾の対応比較に關して、諸説の慎重な吟味の上に自説が展開されている。即ち、共に存在を表現する語尾であるが、四段系ル・レ語尾は動態的作用表現として、動詞語尾機能を付与すべく膠着するのに対して、ラ変系リ語尾は靜態的狀態表現として、形容詞活用語及びその補助活用、その已然形形成にあずかるものであること。完了の助動詞リは、四段活用連用形にアリが結合し、*ra-vo* の変化によって生じた二次的派生とする通説や、*ra-vo* の音韻変化を援用する説を否定して、リ語尾がエ列甲類音語根に直接膠着したものであることを実例に檢し、ア列に膠着するル語尾との混同を避けて母音交替の圏外にあるエ列甲類音に文法的類推による接続をなしたかとする推論。リ(完了)、フリ、ハベリ、ケリ、セリ、メリ、ナリ(伝聞)、ケレ(形容詞已然形)の膠着的複合を、アリ融合の二次的派生語から峻別する立場。東国語「降らる」「干さる」などの形態に、ラ四、ラ変未分化の様相を見ることがある(一節)。

けだし、動態的動作表現と靜態的狀態表現、一次的膠着語群(基礎的構成語)とアリ融合の二次的派生語群(複合的構成語)の區別は、本書における存在詞体系の骨格をなし、アリ融合をすべてにわたって安易に適用する一元説にて錯綜した現象を分析しようとする通説に対しては、肯綮に當る学説として独自の地位を示すものといえよう。次に、アリ融合の語彙の概説(二節I)につづいて、融合の最も古い指定のナリにおける融合の契機と形成過程の解明がなされる(二節II)。ここでは、歌調の整、不整にその主因をおく融合進展の実状が散文との対比によって示され、活用の諸形における融合形の偏在とナリの指

定辞としての語性との関連が詳細に論ぜられている。用例の頻度にかかわる事象の綿密な分析が本書のとり方方法の基調として以下示されていくが、これは先生の言語観を反映するものでもあろう。

第二編各論はアリ融合語の個別についての通時的な詳論である。第一章「指定表現と存在詞」では、指定様式の基本を、文末零、文末ゾ、文末ナリの三形式に發展的にとらえ(一節)、ゾとナリの消長過程について、広汎に使用された主観的な指定性の強いゾがやがてその陳述性を衰頹させて用法を固定化し、また、漢文の「也」字に關連して注釈的文体に保存されてゆくのに對して、客観的な指定性を示す新興のナリが文章用語としての用途を広げてゾに優越し、連体形承接をも成立させてゆく交替的移行現象を資料を駆使して述べてある(二節)。第三節「伝聞推定の助動詞ナリについて」は、終止形接続のナリの本質に關する考察で、伝聞説の代表的見解としてあまりに著名であり、ここに紹介の要はあるまい。指定のナリとは成立を峻別する立場で、先生の存在詞の体系の基礎をなす。次に、タリ(指定)について。その形成に關与する語性を助詞のトにおいて検討し、発達過程を金光明最勝王經古点をはじめ豊富な訓読語資料で示される。タリの訓読語としての融合の特異性―連体形の斉一なる完備とその特殊用法―が明らかにされた(四節)。

第二章「完了の助動詞と存在詞」はテアリの融合をめぐる論究である。まず、韻文におけるタリ形成の進捗度と活用形の偏在はニアリに近似するが、タリ融合のより著しい進展の要因をその連体修飾機能と形式化にあるとして、両者のこまかな相違

の指摘があり、位相に関して、保守的訓法に保持されるテアリの分布とその推移が述べられている（一節）。次に「来たる（足）」とケリの近似と相違を、ル語尾リ語尾の対応関係に見、ケリの本質を、「来」と「有」の要素の分析から、過去或いは他者を主体的に「迎え取る」姿勢を示すものと説明される。過去、回想、発見、詠嘆等の意味の派生が語の構成要素から総括されるが、筆者にはやや難解に感じられた。この節はまた、タリとリの消長にふれ、上接動詞の活用には左右されるだけの東大寺諷誦文稿の興味ある事例の指摘や、院政期以降の資料での文体との関連が付記されている（二節）。

第三章「補助活用と存在詞」では、ナリ、タリとは対蹠的に接続機能の必要から発達する補助活用の形成過程が明らかにされている。即ち、形容詞カリ語尾の形成は、歌調の上の助長があるが、語彙による遅速があつて接続形式が中古にくらべ未発達であり（一節）、ベカリは訓読語での発達が著しいこと。ガル語尾はカリ語尾と対応するもので動態的叙述を担い、位相に關係すること。イマスカリは、通説の複合説（序論一章一節I）によらず、カリ語尾の接尾辞化の後、膠着的に形成されたもので、ガル語尾の性質と近似すること（二節）。ザリの融合も歌調に關係するが、未然形に著しく、ズシテは後の類推による発生とみること（三節）などで、万葉集の訓詁にふれるところがあつた。

第四章「比況の助動詞ゴトシと存在詞」はゴトシの複雑な語尾形態の分析である。本来、副詞形成の用法にそつて発達したゴトシの、形容詞的用法と形容動詞的用法の分岐を位相の上に

観察して、ゴトクニの訓読語より国文体への流用とゴトクナリの抬頭、訓読語におけるカリ活用の潜在形ゴトクナリの非融合の保持の状態が記述され、ゴトキ（訓読調）―ゴトキナリ、ゴトク（国文調）―ゴトクナリの形成の質的相違を説かれる。またその展開と分布の実態が今昔物語集の用例の検索で示されている（一節）。次に、熟語カクノゴトシは形容詞活用及びカクノゴトキニ（ノ）の形をとつて訓読性が強く、ゴトシの一般の用法と相違することを指摘して、訓読資料、今昔物語集などの用例によるその実証がなされる（二節）。しかして、ゴトシのこの二面性は、カカリ・シカリ・サリとカクナリ・シカナリ・サナリの対応する語尾形態に相応じて共通し、形容詞と副詞の中間的性格を示す所以が明らかにされ、多カリと大キナリの形成がゴトシの語尾形態の形成に全く類似することから、これを同じ体系中の類とみなす先生の独自の見解が示されている（三節）。ゴトシの語誌はここに始めて明らかにされたといえよう。

以上、各論におけるラ変活用語展開の史的追求は、広汎な資料の精査とその犀利な分析によつて間断するところなく極められているが、それらの各語は互に系列をなす類としてとらえられており、史的展開を体系化しようとする構想によつて貫徹されている。

第三編結論は二部に分かれる。前半、第一章「存在詞の展開」は、存在詞の体系の構成とその展開についてのまとめである。ラ変活用語は構成要素の形態の分類から、基礎的構成語と複合的構成語に二大別され、更に、形成過程の相違と品詞論的な観

点から四種十一項の整然たる体系として図式化される(三六八頁)。これによって、各語のラ変活用形成の遅速が通時的に観察され、形成に関与する上位語の語性とその結合関係のあり方が判然と示されることになった。アリの補助的役割の本質は、「副詞的な修飾語を、その表現性を變へることなく機能させること」にあると述べられている(一節)。次に、古今集におけるラ変活用語の展開と文体の関係の実状の調査から、韻文のラリ融合に果たす役割が再確認され(二節)、語の消長についての整理と、語尾形式成立の時期を各語について解説して(三節)まとめは終る。

後半、第二章「余説および応用」は、章題の示すごとく本論の記述に関連する八篇の論文をおさめ、特殊研究編の趣きを見せる。

「一 古事記における応用」のIは、高比売命の詠歌の末尾「…迦微曾也」の「也」字を、「故歌曰」の「曰」に呼応する助字とし、ゾをイハクに対応した歌全体の指定と考える可能性を論じ、IIは「如」字の訓法について、ゴトクニ、ゴトクナリの訓を認めず、記伝の訓を改められる。「二 万葉歌における聴覚表現の構文」は、視覚が聴覚に優越することから、推定表現の淵源を聴覚に指定し、複述語文の設定を批判して、視聴覚判断に基づく「聞ゆ」の詞的性格と「見ゆ」の詞辞の二面的性格について述べられる。「三 助動詞「なり」と「めり」の世界」は、視聴覚表現の面で、ナリとメリの共存、交替の事例が源氏物語などに出現することについて、平安時代語におけるその消長は推定対推定の対応として比較されるべきもので、両者の

推定辞としての意義の抽象化に主因があることを指摘されたもの。「四 連体格にたつ「非」字の訓」は、金光明最勝王經の西大寺本と石山寺旧蔵本における打消のズの連体形の比較で、ザル優勢の史的傾向の中で、「非」字については又が保持されている事実の指摘である。「五 「今昔」考」「六 「今昔考」補説」は、説話の冒頭形式「いまはむかし」の構造と解釈に関する独自の説である。「いまはむかし」は「むかし」と次元を異にし、通時的終端としての現在を示す時の副詞で、ケリ体本文を挿んで「とぞ語り(云ひ)伝へたる」に呼応し、「昔を今になす」形で説話伝達の時を示すものとされ、ケリ・タリの本義とのかかわり、源氏物語桐壺巻の冒頭末尾の形式の解釈、宇治拾遺物語の不整形の問題などにふれる。「七 近世初期における指定表現」は、肥後に伝えられた関東系抄物という珍しい資料「五逆秋(無門関抄)」における指定法の記述である。

「八 「なる」の意味変化」は、主格表示の「固有人名十者」の訓読形で、トイフに置きかえられるナルの特殊用法(顔回ナル者・文法上許容事項一六)は、早くは仁斎の古義の点や秋成の兩月物語に見えるという国語史的事実の指摘で、「者」で受ける体言を一律にナルと訓む史的傾向に意味変化の主因があると述べられている。

以上で蕪雑なあらましを終るが、リ・アリを形成素とするすべての複合語が、それぞれの個性を明らかにしつつ、さまざまな文体のかかわりあいの中で一つの体系として帰納されてゆく記述は見事である。未踏の研究成果というべきであろう。また最勝王經の年代を異にする諸点本の比較や巻末の多彩な諸論考

は、更に新たな発展的分野を示唆し、読者の研究心をそそぐてやまないものがある。打消の「絶エにす(あ)レ「不」」(西大寺本最勝王経古点)など、随所に見られる先生ならではの貴重な事例の提示や新見の紹介は、紙幅に余裕なく遺憾ながらす

べて省略した。章節を追っての不要領な要約に終始して意を尽くさないが、この拙文が本書理解の一助ともなれば、先生の講筵に連なった者として喜びこれにすぎるものはない。

(昭和四十三年七月、風間書房刊、四〇〇〇円)

▼受贈雑誌

昭和43年1月～6月(その二)

- 国文学ノート(成城大学短期大学) 5
- 専修国文3
- 日本文学誌要(法政大学) 18・19・20
- 上智大学国文学論集1
- 和洋国文研究6
- 梅花女子大学文学部紀要4
- 跡見学園短期大学紀要5
- 跡見学園国語科紀要16
- 相模女子大学紀要28・29
- 鶴見女子大学紀要5
- 国文学論考(都留文科大) 3・4
- 人文研究(神奈川大) 37・38
- 人文論集(静岡大) 18
- 岐阜大学研究報告16
- 金沢大学法文学部論集15
- 金沢大学教育学部紀要16
- 金沢大学教養部論集5
- 国語国文学(名古屋大) 21
- 国語国文学報(愛知教育大) 21
- 滋賀大國文5
- 愛知県立大学文学部論集18
- 中京大学文学部紀要2巻1
- アカデミア(南山大) 63・64・65
- 富山高校国語国文学研究紀要7
- 国語国文11～5月
- 研究集録(大阪大学教養部) 16
- 文庫(大阪大) 17・18
- 学大國文(大阪学芸大) 11
- 女子大文学(大阪女子大) 19
- 女子大國文(京都女子大) 47・48・49
- 同志社国文学3
- 国文学(関西大) 42
- 人文学(同志社大) 101
- 人文研究(大阪市大) 19巻3～7・8～11
- 人文論究(関西学院大) 18巻2・3
- 障蔭国文学5
- 国文学論叢(竜谷大) 13
- 大谷学報47巻1～4
- 甲南女子大学研究紀要4
- 園田学園女子大学論文集2
- 文林(松蔭女子学院大) 2
- 国文学54・45・46
- 近世文芸稿13
- 中世文芸(広島大) 39・40
- 方言研究年報10
- 島根大学文学部紀要1
- ノートルダム清心女子大学紀要2
- 山口大学文学会誌18巻2
- 山口女子短期大学研究報告22
- 愛媛大学紀要13A
- 愛媛国文研究17
- 学習院大学国語国文学会誌11
- 甲南国文15